

## Part 2 : Permissible limits—限度値

### 1 Scope—適用範囲

[ISO 6486-1 1 とほぼ同文であるため省略]

### 2 Normative references—参照基準文書

[ISO 6486-1 2 と同文であるため省略]

### 3 Terms and definitions—用語及び定義

ISO 6486-1 3 を参照

### 4 Permissible limits—限度値

鉛及びカドミウムの溶出限度値は表 1 の通りである。

表 1 鉛及びカドミウムの溶出限度値

製品区分	n*	判定法	単位	鉛	カドミウム
浅型容器 (2.5 cm 未満)	4	平均値 $\leq$ 基準値	mg/dm <sup>2</sup>	0.8	0.07
深型容器 (1.1 L 未満)	4	4 個全て $\leq$ 基準値	mg/L	2	0.5
深型容器 (1.1 L 以上)	4	4 個全て $\leq$ 基準値	mg/L	1	0.25
貯蔵容器	4	4 個全て $\leq$ 基準値	mg/L	0.5	0.25
カップ及びマグ	4	4 個全て $\leq$ 基準値	mg/L	0.5	0.25
調理器具	4	4 個全て $\leq$ 基準値	mg/L	0.5	0.05

\* : n は 1 試料について試験する個数

### 5 Reproducibility and variability—再現性とバラツキ

[ISO 6486-1 10 と同文であるため省略]

### Bibliography—文献目録

[ISO 6486-1 Bibliography と同文であるため省略]



## ISO 7086 (2000)

### 食品と接触するガラス製中空容器—鉛及びカドミウムの溶出— Glass hollowware in contact with food—Release of lead and cadmium—

研究協力者：小川晋永 社)日本硝子製品工業会

#### Foreword—前書き

国際標準化機構 (ISO) は各国規格機構 (ISO メンバー) の世界的な連合体である。国際規格を作成する作業は通常 ISO 専門委員会によって行われる。委員会が設立された主旨に関心のある各国メンバーは、その委員会に代表を送る権利を持つ。ISO と連携している国際機関もまた、政府組織か非政府組織かを問わず、この作業に参加している。ISO は国際電気技術の標準化に関するすべてのことについて、国際電気標準会議 (IEC) と緊密に共同作業をしている。

国際規格は ISO/IEC 指針 PART 3 の規定に基づいて案が作成される。専門委員会によって採択された国際規格案は、投票のために各国メンバーに回付される。国際規格として公表するには、投票を行うメンバーの 75%以上の賛成を得ることが必要である。

ISO 7086 を構成する内容の一部は、特許権の問題に係ってくるかも知れないことについて注意すべきである。ISO はそのような全ての特許権について検証する責任を負わない。

ISO 7086 は専門委員会 ISO/TC166 (食品と接する陶磁器製品、ガラスセラミック、ガラス製食器) において作成された。

この第2版は、第1版 (ISO 7086 : 1982 年) を破棄し、これに取って代わるものであり、技術的な改訂が行われている。

ISO 7086 は「食品と接触するガラス製中空容器—鉛及びカドミウムの溶出—」という表題の下で、以下の Part から構成されている。

—Part 1 (ISO 7086-1) : 試験法

—Part 2 (ISO 7086-2) : 限度値

#### Introduction—緒言

ガラスの表面からの鉛及びカドミウム溶出によって生ずる問題は、食品の調理、配膳及び貯蔵用に使われるガラス製食器が、不適切な配合、加工により製造された場合に、その使用によって引き起こされる可能性のある危険から人々を確実に守る効果的な方法が必要であるということである。

第二の考慮すべき問題として、ガラス製食器の表面から溶出する有毒物質のコントロー

ルに対する各国のそれぞれ異なった規制は、これらの商品の国際貿易における非関税障壁になることである。従って、鉛及びカドミウムの溶出に関する国際的に承認された試験方法を維持し、有害な重金属溶出の許容量を定義する必要がある。

ISO 7086 の中で規定されている鉛及びカドミウム溶出の許容限度値は、金属の暴露 (摂取) 量の安全性の目安としての許容限度値とすることを意図したものではなく、関係業界における優良製造工程に対応し、世界の主要市場における規制基準に整合させたものであり、かつ、これらの金属の暴露量を全般的に減らそうとする目的を考慮したものである。

## Part 1 : Method of test - 試験法

### 1. Scope - 適用範囲

ISO 7086-1 は食品と接触する用途のガラス製中空容器からの鉛及びカドミウムの溶出試験法を規定する。

ISO 7086-1 は食品や飲料の調理、配膳及び貯蔵に使用可能なガラス製中空容器に適用される。しかし、ガラスセラミック、ガラス製の浅型容器や食品加工業界で使用される容器、容器内に納められた食品の販売のみに供される容器等については適用を除外する。

### 2. Normative references - 参照規格文書

以下の規格文書は参照事項も含めて、ISO 7086-1 の構成要素となっている。日付の記載がある文書の参照について、その後には公布されたこれらの修正や改定は適用されない。ただし、ISO 7086-1 を規格とすることに合意した関係各者には下記の規格文書の最新版を利用することが可能かどうかについての調査を奨励する。日付の記載がない文書の参照においては、その最終版を適用する。ISO と IEC の会員は現在有効な国際規格を支持する。

ISO 385-2 : Laboratory glassware - Burettes - Part 2: Burettes for which no waiting time is specified.

ISO 648 : Laboratory glassware - One-mark pipettes.

ISO 1042 : Laboratory glassware - One-mark volumetric flasks.

ISO 3585 : Borosilicate glass 3.3 - Properties.

ISO 3696 : Water for analytical laboratory use - Specification and test methods.

### 3. Terms and Definitions - 用語及び定義

ISO 7086-1 では以下の定義が適用される。

#### 3.1 atomic absorption spectrometry - 原子吸光光度法 (AAS)

自由原子の吸光度を測定することによって、定性的判定及び元素濃度の定量的測定を行う分光分析法。

### 3.2 atomic absorption—原子吸光

ガス相に存在する自由原子による電磁放射線の吸光であり、ガス相において吸光する原子に固有の線スペクトルが現れる。

### 3.3 bracketing technique—内挿法

最適分析範囲内で、濃度の近い2つの検量専用標準液の濃度を測定し、2つの測定値の中間に、試料の吸光度の測定値あるいは測定装置の指示値を挿入することによって濃度を求める分析法。

### 3.4 calibration function—検量関数

原子吸光光度計の示す試料の吸光度またはその他の装置の指示値と、鉛及びカドミウムの濃度との関数。

### 3.5 direct method of determination—直接測定法

吸光度または装置の指示値を検量関数に代入して試料溶液の濃度を算出する方法。

### 3.6 drinking rim—飲み口

飲み物用容器の縁の最上部から容器のふちに沿った20 mm幅の外表面部分。

### 3.7 extraction solution—抽出液

鉛及びカドミウムの測定に用いられる抽出操作を行った後の4% (V/V) 酢酸。

### 3.8 flame atomic absorption spectrometry (FAAS) フレーム原子吸光光度法

ガス相の中で自由原子を励起させるのにフレームを用いる原子吸光光度法。

### 3.9 flatware—浅型容器

ガラス製品で最深部から溢れ出す点を通る水平面までの垂直の高さが25 mm以下の製品。

### 3.10 foodware—飲食器

食品及び飲料の準備、調理、配膳及び貯蔵の使用を目的とする製品。

### 3.11 glass ceramic—ガラスセラミック

均質な溶液となる高温で原料を溶解した後、通常の微細結晶体を製造する方法に適用されているコンディションと温度で冷却・固化して作られた無機物。

### 3.12 glassware—ガラス製容器

食品と接触して使用されるガラス製容器。

### 3.13 glass—ガラス

原料を高温で完全に溶解し均質化したのちに、冷却・固化して作られた無機物で、本質的に結晶化していないもの。

注：ガラス材は使用される着色剤、乳濁材の量に応じて、透明のもの、有色のもの、不透明なものがある。

### 3.14 hollowware—中空容器

容器内部の深さが25 mm以上のガラス製容器。深さの測定は容器の最深点から溢れ出す点と垂直にぶつかる点の間で行う。中空の容器は容積に基づき3つの区分に分けられる。

- 小容器；容量が 600 mL 未満の中空容器
- 大容器；容量が 600 mL 以上 3 L 未満の中空容器
- 貯蔵容器；容量が 3 L 以上の中空容器

### 3.15 optimum working range—最適測定範囲

濃度と吸光度が実質的に直線関係にある分析用標準液の範囲。

### 3.16 reference surface area—対象表面

通常の使用状態で食物が接する範囲。

### 3.17 test solution—試験溶液

製品から鉛及びカドミウムを抽出するために使用される溶媒 (4% (V/V) 酢酸溶液)。

## 4. Principle—試験法概要

試験対象となる試料表面を 4% (V/V) 酢酸に接触させ、 $22\pm 2^{\circ}\text{C}$  で 24 時間放置する。試料に鉛及びカドミウムが含まれる場合は、試料表面からそれらが抽出される。その溶出量はフレーム原子吸光度法 (FAAS) で測定する。通常の試験では本試験と同等な他の分析方法を使用しても差し支えない。

## 5. Reagents and materials—試薬及び実験材料

### 5.1 Reagents—試薬

測定には分析用標準試薬を用いること。また、蒸留水もしくは ISO 3696 の grade 3 相当に精製された水のみを用いること。

#### 5.1.1 Acetic acid—酢酸

氷酢酸、密度  $\rho=1.05\text{ g/mL}$ 。

#### 5.1.2 Acetic acid test solution—酢酸試験溶液：4% (V/V) 溶液

蒸留水に 40 mL の氷酢酸 (5.1.1) を加え、1 L に希釈する。本試験溶液は試験の都度、新たに調製し、全ての試験が完了でき得る容量を準備する。

#### 5.1.3 Lead stock solution—鉛標準原液

1 L の試験溶液 (5.1.2) に  $1000\pm 1\text{ mg}$  の鉛を含む分析用標準原液を調製する。または、市販の原子吸光分析用 (AAS) 鉛溶液を使用してもよい。

#### 5.1.4 Cadmium stock solution—カドミウム標準原液

1 L の試験溶液 (5.1.2) に  $1000\pm 1\text{ mg}$  のカドミウムを含む分析用標準原液を調製する。または、市販の原子吸光分析用 (AAS) カドミウム溶液を使用してもよい。

#### 5.1.5 Lead standard solution—鉛標準溶液

鉛分析用標準原液 (5.1.3) 1 mL をホールピペットで 100 mL 容メスフラスコに入れ、試験溶液 (5.1.2) で 100 mL に希釈し、よく混合する。

#### 5.1.6 Cadmium standard solution—カドミウム標準溶液

カドミウム分析用標準原液 (5.1.4) 1 mL をホールピペットで 100 mL 容メスフラスコに

入れ、試験溶液 (5.1.2) で 100 mL に希釈し、よく混合する。

注 1：標準溶液は適当な大きさの使い慣らした密閉できる適当な容器 (例：ポリエチレン製等) により品質を損なうことなく 4 週間まで保存できる。新しい容器は標準溶液で満たし、24 時間静置したものであれば、使い慣らした容器として使用できる。この際、使用した標準溶液は廃棄すること。

注 2：ホールピペットまたは精度の良いピストンピペット (500  $\mu$ L 及び 1000  $\mu$ L)、並びに 500 mL~2000 mL 容メスフラスコを用いて、標準原液 (5.1.5 及び 5.1.6) を試験溶液 (5.1.2) で希釈し適当な校正用標準溶液を調製する。この校正用標準溶液は適当な大きさの使い慣らした密閉できる容器に保存する。これらの溶液は 4 週間ごとに再調製する。

## 5.2 Materials—実験材料

### 5.2.1 Paraffin wax—パラフィン

高溶融点のもの

### 5.2.2 Washing agent—洗浄剤

市販されている非酸性の手洗い用食器洗浄剤。メーカーの指示に従って希釈したもの。

### 5.2.3 Silicone sealant—シリコン密封剤

直径 6 mm 程度のひも状になるもの。この密封剤は試験溶液 (5.1.2) へ酢酸、鉛及びカドミウムが溶出するものであってはならない。

## 6 Apparatus—機器

### 6.1 Atomic absorption spectrometer—原子吸光光度計

原子吸光光度計は、鉛、カドミウム専用の光源 (ホローカソードランプや無電極放電ランプ)、バックグラウンド補正装置、及びシングルスロット (約 100 mm) またはボイリング・バーナーヘッドがついているもの。デジタル濃度読取装置がついたものでもよい。エア・アセチレンフレームを使用し、装置メーカーの指示する条件に従って操作する。これらの操作条件に従った場合、濃度特性 (吸光度を 0.0044 にしたときの濃度) は、鉛について波長 217 nm で測定したとき約 0.2 mg/L ( $\pm 20\%$ ) になる。カドミウムについて波長 228.8 nm で測定したとき、濃度特性は約 0.02 mg/L ( $\pm 20\%$ ) になる。

備考；適当と認められる場合には、鉛の分析に 283.3 nm の波長を用いてもよい。

### 6.2 Accessories—付属品

#### 6.2.1 Assorted glassware—ガラス器具

必要な場合は ISO 3585 に指定されたホウケイ酸ガラス製のものを使用する。

#### 6.2.2 Burette—ビュレット

0.05 mL 毎にメモリがついている 25 mL の容量のもので、ISO 385-2 規定の class B の条件を満たすもの、またはそれ以上のもの。

#### 6.2.3 Covers—カバー

テスト中の試料にかぶせるフタで、例えば種々の大きさのプレート、時計皿、ペトリ

皿など。暗室が無い場合には不透明のものを使用する。

#### 6.2.4 One-mark pipettes—ホールピペット

10 mL 及び 100 mL 容量のピペットで ISO 648 規定の class B の条件を満たすもの、またはそれ以上のもの。必要な場合はこれ以外の容量のものでもよい。

#### 6.2.5 One-mark volumetric flasks—メスフラスコ

100 mL 及び 1000 mL 容量のメスフラスコで、ISO 1042 規定の class B の条件を満たすもの、またはそれ以上のもの。必要な場合はこれ以外の容量のものでもよい。

#### 6.2.6 Precision piston pipettes—精密ピストンピペット

ストロークが固定式のもの。一般的なものでは容量 500  $\mu$ L 及び 1,000  $\mu$ L。

#### 6.2.7 Straight edge and depth gauge—直定規及び深さゲージ

1 ミリ単位で校正されたもの。

### 7 Sampling—試料の採取

#### 7.1 Priority—優先順位

数種類の食器が混じったロットの中から試料を採取する際は、それぞれの区分で表面積／容積の比率が最も高い容器を優先すること。特に、食品と接触する表面が高度に着色あるいは印刷されているものを特に優先するよう考慮する。

#### 7.2 Sample size—試料数

状況に応じた採取方法を設定することが望まれる。測定対象の試料数が 4 検体未満にならないようにすること。各検体は、寸法、形状、色、印刷が同一であること。

#### 7.3 Preparation and preservation of test samples—試験試料の調製と保管

試料は試験に影響を与えるような油分やその他の物質を除去し清潔であること。試料は非酸性の洗剤が入った 40°C 程度の溶液で手早く洗う。水道水ですすいだ後、蒸留水または同等の純度の水ですすぐ。乾燥機にかけるか、新しいろ紙でふき取ることによって、水気を切り乾燥させる。汚れの残っている試料は使用しない。洗浄後は試験される面に手を触れてはならない。フタの内側は別として、通常の使用状態で試料表面の一部が食品と接触しない場合には、最初の洗浄・乾燥後にその部分をパラフィンやシリコーンのような保護コーティングで覆う。これは鉛及びカドミウムの試験溶液へ溶出しないようにし、試験溶液への影響を排除するためである。

### 8 Procedure—操作

#### 8.1 Extraction—抽出

##### 8.1.1 Extraction temperature—抽出温度

抽出は 22 $\pm$ 2°C で行うこと。カドミウムの測定を行う際には暗所で抽出を行うこと。

##### 8.1.2 Leaching—溶出

それぞれの試料において、表面から溢れ出す点まで垂直に 1 mm まで試験溶液 (5.1.2)



で満たす。カバーをして 24 時間±30 分溶出させる。

### 8.1.3 Sampling of the extraction solution for analysis—分析用抽出液の採取

抽出液を採取する前に、かき混ぜるか他の適した方法で抽出液を均一化させる。このとき、抽出液の減少や試験した表面に磨損を生じさせないように注意する。必要量の抽出液をピペットで他の適当な保存容器に移す。

鉛及びカドミウムが保存容器の壁面に吸着する恐れがあるのでできる限り速やかに分析する。特に鉛及びカドミウムとも低濃度の場合には注意すること。

### 8.2 Drinking rim and other special tests—飲み口及びその他の特殊な試験

ガラス製中空容器の飲み口部分は、それぞれの外面のふちから 20 mm 下の所に印をつけて試験を行う。それぞれのガラス製容器を逆さにして、試料容器の 1.25 から 2 倍の直径を持つ実験用ガラス容器に入れる。試料につけた 20 mm の印のところまで、4%酢酸溶液を実験用ガラス容器に入れる。22±2°C で 24 時間静置する (カドミウム測定は暗所で静置)。このとき過剰な蒸発から保護すること。浸出溶液をサンプリングする前に、必要であれば (液量が減少したとき等) 20 mm の水位に戻すため、4%酢酸溶液をガラス容器に追加すること。鉛及びカドミウムを原子吸光法で測定し容器当たりの溶出量 (mg per articles) として報告する。

### 8.3 Calibration—検量

原子吸光光度計をセットアップする際は、製造メーカーのマニュアルに従って、バックグラウンド効果を補正しながら、鉛を測定する場合は 217.0 nm、カドミウムを測定する場合は 228.8 nm の波長に設定すること。

ゼロ点校正用の校正溶液を使用してゼロ点調整を行う。試験溶液で希釈した標準溶液で作成した校正溶液セットを測定し、直線性のある範囲での検量線を作成する。

推奨する測定範囲：

—Pb : 0.5 mg/L から 10.0 mg/L

—Cd : 0.05 mg/L から 0.5 mg/L

### 8.4 Determination of lead and cadmium—鉛及びカドミウムの測定

前述のように光度計を設定する。蒸留水を吸い込ませ、次いで 4%酢酸溶液を吸い込ませて、吸光度がゼロであることを確認する。試験溶液を吸い込ませた後、分析用抽出液を吸い込ませ、抽出液の吸光度を測定する。

抽出液の鉛濃度が 10 mg/L を超える場合には、適当量の抽出液を試験溶液で希釈し、濃度が 10 mg/L 以下になるよう試験測定溶液を調製すること。カドミウムを測定する際にも同様の配慮を払うこと。

## 9 Expression of results—結果の表示

### 9.1 Bracketing technique—内挿法

抽出溶液中の鉛及びカドミウム濃度 ( $\rho_0$ ) は mg/L で算出し、次式により求める。

$$\rho_0 = \left[ \left( \frac{A_0 - A_1}{A_2 - A_1} \right) (\rho_2 - \rho_1) + \rho_1 \right] d$$

$A_0$  : 抽出溶液中の鉛またはカドミウムの吸光度

$A_1$  : 低濃度側の検量線溶液中の鉛またはカドミウムの吸光度

$A_2$  : 高濃度側の検量線溶液中の鉛またはカドミウムの吸光度

$\rho_1$  : 低濃度側の検量線溶液中の鉛またはカドミウムの濃度 (mg/L)

$\rho_2$  : 高濃度側の検量線溶液中の鉛またはカドミウムの濃度 (mg/L)

注 : 抽出溶液が希釈されている場合、前式において適切な希釈係数  $d$  を使用する。

## 9.2 Calibration curve technique—検量線法

検量線または装置の直接読み出しから、抽出溶液中の鉛またはカドミウムの濃度 (mg/L) を直接読み取る。

## 10 Reproducibility and variability—再現性とばらつき

陶磁器製食器からの鉛及びカドミウム溶出量測定は、分析再現性の誤差と試料採取時の不安定性が問題である。ここに挙げられている項目は科学的に、そして技術的に興味を引くものではあるが、ISO 7086 の試験法及び限度値に関連し標準規格が定められたり、法令があるわけではない。

### 10.1 Reproducibility—再現性

鉛及びカドミウム濃度の分析測定には、3種類の測定誤差が生じる。

次の表 1 に、それぞれおよその標準偏差<sup>[2]</sup>を示した。

表 1 Pb と Cd の測定におけるばらつきの原因

1	ばらつき発生源	Pb 測定時の標準偏差 (mg/L)	Cd 測定時の標準偏差 (mg/L)
2	同一試験室内の分析	0.04	0.004
3	別個の試験室内の分析	0.06	0.007
4	試験室と試料との相互作用	0.06	0.01
5	再現性	0.094	0.012

表 1 の 4 行目にある統計上の相互作用という項は、試験室間で差ができないはずの試料分析において差を生じたということを表している。詳細については、基本統計学のテキスト (ANOVA : 誤差分析法) に記載されている。再現性は、上記 3 種類のばらつきにおける標準偏差を 2 乗した値の合計の平方根である。

### 10.2 Variability—ばらつき

ガラス表面からの抽出固有のばらつきと比較し、分析的な再現性は良好である。この“試料採取のばらつき”と称される抽出反応固有のばらつきは、実験誤差が生じる最も

大きな原因である。Moore<sup>[3]</sup>は大容器における鉛及びカドミウムの溶出のばらつき係数は通常60%であることを報告した。そのため、4検体中1検体が2 mg/Lを上回る確率が10,000分の1に制限されるのを避けるためには、大集団での鉛溶出量の真の平均値は約0.58 mg/Lとなるだろう。表2は集団における平均値の衛協と1/4または1/6の検体が2 mg/Lの限度値を上回る確率の標準偏差を示している。

表2 限度量2 mg/Lを超える確率

母集団の平均値	母集団の標準偏差	試料4個に1個が 2 mg/Lを超える確率	試料6個に1個が 2 mg/Lを超える確率
0.4	0.24	<0.00001	<0.00001
0.8	0.48	0.13826	0.20005
1.2	0.72	0.75836	0.88122
0.4	0.12	<0.00001	<0.00001
0.8	0.24	0.00002	0.00004
1.2	0.36	0.32568	0.44627

## 11 Test report

試験報告書には次の事項を記載する。

- a) ISO規格7086-1との関連。
- b) 試料の識別(型式、生産国、仕向地等)
- c) 試料数
- d) 試験結果は個々の試料毎の値及び試料群毎の平均値を表示する。深型容器の測定値については、鉛は0.1 mg/L、カドミウムは0.01 mg/Lまで求めて報告する。浅型容器の測定値は、鉛は0.1 mg/dm<sup>2</sup>、カドミウムは0.01 mg/dm<sup>2</sup>まで求めて報告する。  
注：補足事項として、浅型容器の試験溶液の濃度も同様に0.1 mg/L、カドミウムは0.01 mg/Lまで求めて報告する。
- e) 測定時に気付いた異常な現象
- f) 任意の試験方法 (ISO 7086-1に含まれてない試験方法)

## Bibliography—参考文献

- [1] ISO 4788: 1980, Laboratory glassware - Graduated measuring cylinders.
- [2] ASTM Standard Test Method for Lead and Cadmium Extraction from Glazed Ceramic Surfaces, C738-94.
- [3] MOORE F., Transaction Journal of British Ceramic Society, Vol. 76 (3) 1997, pp. 52-57.
- [4] McCAULEY R. A., Release of lead and cadmium from ceramic foodware decorations, Glass

- Technol., 23[N 2]pp. 101-105 (1982).
- [5] CARR D. S., Cole J. F. and McLaren M. G, Glass foodware safety; III, Mechanisms of release of lead and cadmium, *Glassa* (Sao Paulo), 28[N148] pp. 151-155 (1982).
- [6] FREY Emmo and SCHOLZE Horst. Lead and Cadmium release from fused colors, glazes, and enamels in contact with acetic acid and food under the influence of light. *Ber. Dtsch. Keram. Ges.*, 56 (10) pp.293-297 (1979).
- [7] WHO/Food Additives HCS/79.7. Glass Foodware Safety, Critical Review of Sampling, Analysis, and Limits for Lead and Cadmium Release (Report of a WTO Meeting, Geneva 12-14 November 1979).
- [8] WHO/Food Additives 77.44. Glass Foodware Safety, Sampling, Analysis, and Limits for release (Report of a WTO Meeting, Geneva 8-10 June 1976).
- [9] Proceedings, International Conference on Glass Foodware Safety. pp. 8-17, 1975, Lead Industries Association Inc., 292 Madison Avenue, New York, NY 10017, USA.
- [10] WHO Food Additives Series No. 4, 1972.
- [11] WHO Technical Report Series No. 505, 1972.

## Part2 ; Permissive limits—限度値

### 1 Scope—適用範囲

[ISO 7086-1 1 と同文であるため省略]

### 2 Terms and definitions—用語及び定義

[ISO 7086-1 3 と同文であるため省略]

### 3 Permissible limits—限度値

鉛及びカドミウムの溶出限度値は表1の通りである。

表1 鉛及びカドミウムの溶出限度量

製品区分	n*	判定法	単位	鉛	カドミウム
小容量 (600 mL 未満)	4	4 個全て ≤ 基準値	mg/L	1.5	0.5
大容量 (600 mL ~ 3 L)	4	4 個全て ≤ 基準値	mg/L	0.75	0.25
貯蔵容器 (3 L 以上)	4	4 個全て ≤ 基準値	mg/L	0.5	0.25

\* : n は 1 試料について試験する個数

### 4 Reproducibility and variability—再現性とバラツキ

[ISO 7086-1 10 と同文であるため省略]

## Bibliography—参考文献

- [1] ISO 385: 1984, Laboratory glassware – Burettes - Part 2: Burettes for which no waiting time is specified.
- [2] ISO 648: 1977, Laboratory glassware - One-mark pipettes.
- [3] ISO 1042: 1998, Laboratory glassware - One-mark volumetric flasks.
- [4] ISO 3585: 1998, Borosilicate glass - Properties.
- [5] ISO 3696: 1987, Water for analytical laboratory use - Specifications and test methods.
- [6] ASTM Standard Test Method for Lead and Cadmium Extraction from Glazed Ceramic Surfaces, C738-94.
- [7] MOORE F., Transaction Journal of British Ceramic Society, Vol. 76 (3) 1997, pp. 52-57.
- [8] McCauley R. A., Release of lead and cadmium from ceramic foodware decorations, Glass Technol., 23[N 2]pp. 101-105 (1982).
- [9] Carr D. S., Cole J. F. and McLaren M. G., Glass foodware safety; III, Mechanisms of release of lead and cadmium, Glassa (Sao Paulo), 28[N148] pp. 151-155 (1982).
- [10] Frey Emmo and Scholze Horst. Lead and Cadmium release from fused colors, glazes, and enamels in contact with acetic acid and food under the influence of light. Ber. Dtsch. Keram. Ges., 56 (10) pp.293-297 (1979).
- [11] WHO/Food Additives HCS/79.7. Glass Foodware Safety, Critical Review of Sampling, Analysis, and Limits for Lead and Cadmium Release (Report of a WHO Meeting, Geneva 12-14 November 1979).
- [12] WHO/Food Additives 77.44. Glass Foodware Safety, Sampling, Analysis, and Limits for release (Report of a WHO Meeting, Geneva 8-10 June 1976).
- [13] Proceedings, International Conference on Glass Foodware Safety. pp. 8-17, 1975, Lead Industries Association Inc., 292 Madison Avenue, New York, NY 10017, USA.
- [14] WHO Food Additives Series No. 4, 1972.
- [15] WHO Technical Report Series No. 505, 1972.